

スポーツに内在する問題について（3）

幼児教育学科 岡部 修 一

1. プロスポーツ選手への道の険しさ

ラジオを聴取していると、某緑茶メーカーのCMで「スポーツする子にいじめなし」とのフレーズが流れ、思わず苦笑いする。これこそ世間一般がスポーツに対して抱く幻影である。

スポーツ＝爽やか、純粹無垢あるいはスポーツ選手＝正々堂々、清廉潔白といった図式は、大いなる誤解であり錯覚に過ぎない。努力や忍耐、克己、辛抱など美德とされる精神素養を包含するスポーツは、とりわけマスメディアの手によってドラマチックに仕立てあげられ、センセーショナルに語られることが多い。「努力する者が報われる」との社会的通念は現実世界ではなかなか具現化しないが、本来は報われてほしいという潜在的願望とも相まって、マスメディアが報じるスポーツの感動的なノンフィクション物語となり世間の耳目を集める。その結果、多くの人々にとってスポーツは現実を離れた仮想世界での成功体験として代償的存在となる。

こうしたスポーツに対する好印象は、自分の子どもたちにスポーツをさせたいという親を増やす。スポーツに勤しんでもらいたいという単純な希望にとどまらず、一流選手やプロスポーツ選手にさせたいという期待へと増幅することがある。野球、サッカーにとどまらず近年ではゴルフにもそういった傾向が顕著になりつつある。

しかし、プロスポーツ選手として活躍し生活を成り立たせることのできる人間は、ごく僅かである。例えばプロ野球の世界に、「松坂世代」と呼ばれる1980年4月2日から1981年4月1日までに生まれた今年度27歳を迎える選手たちがいる。松坂とは、プロ野球パシフィックリーグに属する西武ライオンズに在籍し、現在はアメリカメジャーリーグ（MLB）アメリカンリーグ東地区のポストレッドソックスに所属する松坂大輔投手のことである。彼はドラフト1位指名を受けて高校卒業後に即プロ野球入りし、1999～2006年までの8シーズンで通算成績108勝60敗1セーブ、勝率6割4分2厘、投手としての個人タイトル獲得は新人王の他、最多勝利3回、最多奪三振4回、最優秀防御率2回など、高卒即プロ入り選手として輝かしい実績を上げた。この松坂大輔と同年代のプロ野球選手には優秀な選手が多い。投手では久保・木佐貫（巨人）、藤川・久保田・江草（阪神）、永川（広島）、和田・杉内・新垣（ソフトバンク）、久保（ロッテ）、野手では矢野（巨人）、村田（横浜）、東出・梵（広島）、森本・工藤（日本ハム）などは今シーズンほぼ全試合1軍登録された上に、中心選手としての活躍している。この他にもサブメンバーの立場で1軍出場を果たしている選手も10数名にのぼる。

松坂世代と称される1998年に高校3年生であった高等学校硬式野球部員は、登録数によれば4万2551名である。そのうちプロ野球入りしたのは、後に大学野球や社会人野球を経て入団した選手も

合わせれば90名（うち昨シーズンまでに22名が退団）。単純計算すればプロ野球に入団できたのは約473人に1人の割合であり、さらに1軍で活躍して実績をあげているといえるのはおよそ25名、約1700人に1人の確率となる。優秀な選手が多いとされるこの松坂世代でさえ、1700倍の狭き門であり、この事実を考えればプロ野球選手になるよりは、医者や研究者になる方がはるかに現実性が高いといえる。

2. スポーツを歪める大人たち

最近目立つようになってきたプロゴルファー志向も同様である。現在、プロゴルファーと称されるツアープロ、ティーチングプロの資格を持った人間は男女合わせておよそ5000人を越えている。その中でツアーの賞金で生活を営むことができるのは男女それぞれ30人ほどのトップレベルの選手に過ぎない。いわばプロゴルファー全体から考えれば、華やかなスポットライトを浴びプロスポーツ選手らしいキャリアを送れるのは70～80人に1人ということになる。しかしここ数年、ジュニアゴルフは大賑わいである。子どもたちが「プロゴルファーになりたい」と口々に夢を語る。そのこと自体には問題はない。それは消防士や宇宙飛行士になりたいと言うことと大差なく、漠然とした未来への夢であるからである。しかし小学生の子どもの親が「将来はプロゴルファーになって欲しい」「プロゴルファーにしたい」と語ることには、大いなる疑問を感じざるを得ない。

プロ野球選手しかり、プロゴルファーしかり、その道がどれほど困難で厳しいものか、一流の実績をあげ生計を立てることができることがどれだけ確率的に低いのか、大人である親は、現実を理解し冷静な判断ができていのだろうか。むろん子どもには無限の未来が広がっており可能性としてゼロでないし、親子で夢を追うことを全面的に否定するものではない。しかし、ゴルフにはとりわけ多大な金銭的負担がかかるだけに、次第に金も出すが口も出す親の行き過ぎた干渉につながるケースが少なくない。

最近のジュニアゴルフ競技大会では、スコアが良くなかった子どもに対して、親が激しく叱責したり時には手をかけたりするケースが少なからず見受けられるという。こうした傾向は、叱られたくない殴られたくないばかりに、ジュニアゴルファーたちが競技中に不正をはたらくことにつながる場合もある。例えば、OB（Out of Bounds：定められた境界外にあるボール。1罰打を付加し定められた措置でプレーをしなければならない）のボールを境界内へ動かす、あるいは別なボールにすり替えてプレーを続ける、あるいはルール上救済を受けることのできる状況以外はすべてボールのあるがままで打たなければならないにもかかわらずライの改善（ボール近辺の状態を打ちやすいように変える）を行うというケースや、同じ組の子ども同士でスコアを改ざんし合ったりなど、正々堂々どころか誤魔化しとズルの横行という憂慮すべき状況が少なくない。もちろんこれらの子どもたちの不正は親に関係なく、子どもたち自身の行き過ぎた勝利至上主義の価値観による場合もあろう。しかしスコアにこだわり、成績に感情的になる親の振る舞いによって引き起こされることも決して少なくない。

宮里 聖志、優作、藍という三兄妹をプロゴルファーに育てた、父親でレッスンプロの宮里 優は、「私はスコアが悪くて叱ったことは一度もない。どれだけ練習を積んでいるとしてもゴルフのショット

やパッティングに好不調の波はつきものだし、流れが悪いときも運不運もある。したがって常にベストを尽くすことは厳格に求めたがスコアで一喜一憂することはなかった。」と述べている。また「私が叱ったり怒ったのは、マナーや取り組む姿勢の上でのこと。ふてくされたり投げやりな態度また道具やコースに八つ当たりするような行為をした時は、それこそゴルフなんかやめてしまえッとして烈火のごとく怒りました。」すなわち宮里父が三兄妹に教えたのはゴルフのスコアうんぬんよりも、他人が見て見苦しいことや不快にさせるようなことはするな、ということである。現在、マスメディアを通じて人前に露出する機会の多い宮里 聖志、優作、藍の三兄妹プロゴルファーは、優等生過ぎて面白味がないと揶揄する向きもあるが、少なくとも彼らが不遜な態度や他人を不愉快にさせる発言を行うのを見たことはない。父の教えは子どもたちにしっかりと根付いているようだ。

一方、スコアが悪いと子どもを怒鳴り散らし手をあげることさえ行う親は、いったい何を子どもに教え伝えたいのであろうか。自分たちの感情的な態度が、子どもに不正をはたらかせスポイルする大きな要因だということが理解できていない。親が子に教え込むべきことは、自尊心と正義感、良心そして倫理観である。目的達成のためには手段も選ばず、わからなければ何をしてよい、このような無節操な観念をスポーツを通じて子どもに植え付けることが親としてあるべき姿なのであろうか。大学の研究者になれるよりもプロスポーツ選手になれる方が、はるかに確率的に低いのである。脚光を浴びその名が世間に知れ渡るひと握りの一流スポーツ選手の陰で、その何十倍、何百倍という選手が日の目を見ず挫折していくのだ。そういった過酷な現実も認識できず、子どもをプロスポーツ選手にと躍起になることは、スポーツの厳しさ、難しさ、そして楽しさや価値を親自身がまったく理解しない浅薄さや身勝手さの発露に他ならない。そしてある意味でスポーツの本質に対する冒涇でもある。

3. 王子をめぐる狂騒

今年5月、日本の男子プロゴルフツアーで前代未聞の出来事が起こった。5月17日～20日に岡山県の東児が丘マリンヒルズゴルフクラブで開催されたマンシングウェアKSBゴルフカップにおいて15歳のアマチュアゴルファーが優勝したのである。百戦錬磨の並み居る大人のプロゴルファーを尻目に、ゴルフ経験10年に満たない高校1年生が頂点に立った衝撃的事実は、世間に大きな驚愕と賞賛をもたらした。世の中がニューヒーローを求めるのは当然の成り行きであるが、「ハニカミ王子」と名付けられた彼をめぐるその後の喧騒ぶりは、過熱するマスメディアの扇動もあり、常軌を逸する状態だった。

「ハニカミ王子」と名付けられた時点で、世間の異常な注目と関心が集まることは自明の理であった。「〇〇王子」と称されたのは彼が2人目である。1人目は昨夏の全国高校野球選手権大会で優勝した投手で、試合中のマウンドで青いミニタオルで汗をぬぐう仕草から「ハンカチ王子」と呼ばれた。彼は2006年度夏の甲子園決勝戦で延長15回1-1、決勝戦としては37年ぶりの引き分け再試合となり、延長になっても衰えない球速と落ち着いた様子などでさらに注目を浴び、翌日の決勝再試合でも前日の疲れを全く見せない投球で母校の初優勝に大きく貢献した。決勝戦はNHKで視聴率29.1%、決勝再試合も平日の日中にもかかわらず23.8%と高視聴率を記録。優勝時のインタビューでは家族や野

球部員への感謝の気持ちを素直に表し、その誠実さや精神的な強さが彼の魅力としてさらにマスコミに取り上げられるようになる。甲子園大会終了後、週刊誌の記者やテレビのレポーターが取材に殺到し、ハンカチ王子フィーバーともいふべき社会現象を引き起こしたのは記憶に新しい。

スポーツ界のヒーローが世間の注目を集め、人気が沸騰すること自体は珍しくはないが、概ねファン層の間での限定的なものか、試合や大会終了後のごく一時的なブームに過ぎないことが多い。しかし「ハンカチ王子」「ハニカミ王子」と称された二人の場合は、幅広い年齢層の、それも日頃は野球やゴルフにそれほど関心を寄せない人々、具体的には中高年女性に絶大な関心を寄せられ人気を集めたことである。その理由は具体的には説明しにくい、彼らの風貌や雰囲気、汗臭さや泥くささなどの暑苦しいイメージから、かけ離れたものであることも関係していると考えられる。筋肉隆々ではなくスポーツ選手としては一見華奢に見える体型やそれほど高くない身長（176cmと171cm）も影響しているであろう。ごく普通に見える十代後半の男の子が、野球とゴルフというそれぞれのスポーツで超人的活躍を見せたのである。しかも二人はいずれもマスコミのインタビューに際して、家族やチームメイトへの感謝の言葉をはじめ明快で整った喋り方をしたことで、その誠実さや素直さが彼らの魅力をさらに高めることにつながった。

野球界のハンカチ王子は現在、東京六大学野球に所属する大学に進学し、1年生の春季リーグ戦から主力投手として活躍している。近年人気低迷といわれていた東京六大学野球であるが、彼が所属する大学の2007年春季リーグの試合には、観客数が11試合で22万8000人、1試合平均2万727人集まった。これは2006年春季リーグの同大学の13試合で9万9000人、1試合平均7615人に比べて3倍近い数字であり、また民放テレビによる試合中継も行われるようになるなど、彼の人気未だ衰えずという状況である。

ゴルフ界のハニカミ王子に対する騒動は、さらに甚だしかった。前年の野球のハンカチ王子同様に、週刊誌の記者やテレビのレポーターが取材に殺到し、ハニカミ王子フィーバーという社会現象を再び引き起こす。そのような中、マスメディアの無軌道な暴走ぶりは呆れ果てるものだった。男子プロツアーでの優勝後、彼の本来の競技ステージのひとつである2007年関東アマチュアゴルフ選手権において、民放テレビ局が取材の一環として彼と同組の同伴競技者に小型マイクを装着してほしいとの依頼を行ったり、大会上空に中継ヘリコプターを低空で飛ばしプレイを妨げるなどの非常識な事件を起こした。また2007年6月の全米オープン開幕前の公式会見の席上、日本の民放テレビ局記者がタイガー・ウッズやフィル・ミケルソンに対し「ハニカミ王子を知っているか？」と質問し、メジャーの舞台では全く場違いな質問であり、世界中の記者から失笑がもれたと報じられている。確かに高校生アマチュアゴルファーの男子プロツアー優勝は空前の快挙ともいえるが、日本国内での出来事である。それを世界のメジャー大会直前の公式会見で、世界トップレベルの選手の前で話題にしようとする無節操ぶりは、見識を疑われて然りであろう。

そもそもアマチュアゴルフ選手権大会がテレビ中継されること自体、前代未聞の出来事であったが、その放送の中でゴルフ界に影響力のある重鎮ともいふべき人間の信じ難い発言を耳にした。その人間は「ゴルフジャーナリスト」「ゴルフキャスター」などの肩書きでゴルフ中継の解説ゲストを行い、またいくつかのプロツアーのトーナメント・プロデューサーを務めるなど、日本のゴルフ界に大きく関わる立

場にいる。その人間は、ハニカミ王子と呼ばれる才能あふれる若者の登場が嬉しくて仕方がないのであろう。中継の中では彼に対する賞賛一辺倒である。

「他の選手も見たいから映してほしいとおっしゃる方もいますがね、そもそも彼がいたからこの大会がテレビ中継されたわけで、彼以外の選手を映す必要性は感じません。ま、他の選手は彼のおかげで注目が集まることに感謝しなくちゃね」まるで他の選手はハニカミ王子の前にひれ伏せとでも言うかのようない草であった。

さらに二度にわたってミスショット後にクラブを投げ落とした彼の行為を、「いや、あれはね、スイング後の流れの中で落ちただけで、投げるといような非礼な行為ではないですよ、全く気にする必要ありませんね」と堂々とうそぶいた。本人がその行為をマスメディアのインタビューで、見苦しくマナー的に良くないことと反省の弁を述べているにもかかわらずである。

プロツアーにあってもしばしば見受けられるのだが、ゴルフにおいてミスショットの後にクラブを放り投げる、投げ捨てる、芝や大地を力任せに叩きつけるなどの行為は、自分のミスや不甲斐なさをゴルフクラブやコースに八つ当たりしているに過ぎない。メンタル面でのコントロールがとりわけ重要とされるゴルフでは、その人間が未成熟であることを示す、見苦しく恥ずべき行為といえる。ゴルフ界に影響力の大きい立場の人間であればこそ、時代の寵児となった若きヒーローに対しても「あれはよくないです。こういう点を直していけば、精神的にもますます強くなっていけるでしょう」とでも苦言を呈すべきではないのか。あるいは本人が反省しているのであるから失敗を潔く認める素直さを褒めてもよいはずである。それを「気にする必要ない」とは、これでは強ければ何をしても良い、才能があれば何でも許されるという悪しき風潮への迎合である。若く精神的に未成熟な段階では、スポーツ選手本人が勘違いするケースは少なくないのだが、このケースでは取り巻く大人までもが舞い上がり、冷静な判断力を失っているといえる。男子プロゴルフ界は現在、人気凋落傾向で関係者の苦悩も深い。突如出現した救世主のような若者を、人気回復の起爆剤としたいという切実な思いも理解できる。しかしそれだけに、若く将来性豊かな彼への、正しい指導が求められよう。

ゴルフ界についていえば、昨年スコア改ざん問題を起こし5年間の出場停止処分を受けた若手プロゴルファーが、昨年11月韓国のプロテストを受けて合格した。合格発表後に事実を把握した韓国ゴルフ協会は「日本で出場停止処分中の選手が韓国プロツアーで試合出場することには、道義的に問題がある」として同選手への合格取り消しの措置をとった。国内で出場停止なら海外ではいいだろうという安直な考えによるものであろうが、彼の周囲の大人はいったい何をしているのだろうか。スコア改ざんという、ゴルフの根幹あるいは人間としての本質に関わる不祥事を起こしながら、悔恨や反省の姿勢の見受けられないその若手プロゴルファーに対して、人としてあるべき道を説くどころか、抜け道をアドバイスするような大人しかいない状況は、結局本人をスポイルする結果となる。ゴルフさえ出来ればいい、才能があるのだから何をしても構わない、そういった身勝手に独善的な考えが改まらない限り、彼にプロゴルファーとしての未来はないであろう。

4. 特待生問題

高校野球では今年3月、根幹を揺るがすような問題が発生した。「特待生」をめぐる一連の騒動である。発端はプロ野球球団のスカウト活動に際して、2人のアマチュア選手に裏金として金銭供与が行われていた事実の発覚にあった。

野球界においては、主にアマチュア側の取り決めによりプロとアマチュアの間には厳格に線引きが成されており、進路を決定すべき一定の時期が来るまでは、プロ球団の関係者と接触することさえも厳に禁じられているのだ。これはかつてプロ球団の新人獲得が自由競争方式だった時代に、高校野球や社会人野球のアマチュア選手に対して、プロ野球側が無秩序ともいえる青田刈りのスカウト活動を行った、その結果としてアマチュア野球界が講じた措置である。近年ではプロ経験者のアマチュア復帰や、高校生への講習会的活動など、一定のルールのもとで交流が図られるようにはなったが、裏金による金銭供与というのは論外である。

金銭供与を受けていた2人のアマチュア選手のうち、大学野球の選手は学生野球憲章違反により退部（その後大学も退学）となり、社会人野球選手の方は1年間の対外試合出場停止の処分を受けた（処分はそれぞれ日本学生野球協会と日本野球連盟による）。

ところが問題はそれだけにとどまらなかった。裏金の経緯と状況を調査していた全国高等学校野球連盟（以下、高野連）は、私立高等学校において学生野球憲章に違反する特待生制度が行われている事実を把握する。日本学生野球憲章による学生野球憲章第13条には「選手又は部員は、いかなる名義によるものであっても、他から選手又は部員であることを理由として支給され又は貸与されるものと認められる学費、生活費その他の金品を受け取ることができない。」とあり、要するに野球部員であることを理由として、学費免除や奨学金貸与される制度を設けてはならないと明確に規定されているのであるが、その憲章を無視する形で、中学生有望選手獲得の方策として特待生制度が活用されていたのである。

高野連のその後の高野連の実態調査によって、特待生制度が全国の私立高等学校376校で導入され、7971名の選手に適用されている事実が判明した。今年5月末日時点での高野連加盟校および登録部員数は4192校16万8501名であり、特待生制度を報告された376校7971名は、加盟校の8.97%、部員数で4.73%に相当した。

調査の結果を受け検討を重ねた末、高野連は特待生制度を導入していた私立高等学校に対し制度の廃止と部長の引責辞任を求め、さらに制度該当部員に対しては5月3日～31日までの対外試合出場停止処分を言い渡した。しかしその後、特待生制度の即時全面撤廃は大きな混乱を招くとして、救済措置を講じた。それは在学中の特待生選手および来年度入学予定生徒に関しては学校長が経済的救済を必要と認めた場合には、学生憲章違反とはみなさず、制度を適用できるとするものである。

今回の特待生制度をめぐる一連の騒動の中で、全国で8千人にも達するかの高校生球児が処分を受けたことになる。処分自体はひと月足らずの対外試合出場停止であり、メインイベントである夏の全国高校野球選手権大会都道府県予選には出場できたのであるから、大きな影響は与えなかったと見る向きもある。しかし8千人近い高校球児たちの中には、6～7月に始まる夏の甲子園地方予選に向け、この時期の試合で結果を残しレギュラー獲得やベンチ入りメンバー入りを狙っていた選手もいたはずである。

そういった選手たち、とりわけ3年生である場合は、努力と進歩の成果を発揮する舞台が奪われ、最後の夏の本番でのレギュラーやベンチ入りの目標がかなわないこともあったであろう。あるいはチーム全体で考えても、重要な夏の都道府県予選を控えたこの時期にベストメンバーで実戦調整が出来なかった影響は少なくないはずである。すなわち高野連の対外試合出場停止は寛大な処分に思えて、実際には夢や目標を奪われたケースを生み出したに違いない。高野連の有識者といわれる委員たちが、密室で議論を重ね机上で考案した処分によって、泣かされた高校生球児が存在するのである。

時代にそぐわないともされる学生野球憲章の是非は別として、これまで長い年月、私立高等学校の特待生制度を高野連が黙認ではないが放置してきたことは確かである。8千人にも及ぶ処分者を出す裁定を平気で下す高野連、その組織としての管理責任が問われないのは片手落ちではないだろうか。周辺の大人は傷つかず、現場の選手ばかりが損をする、そのような体質には大いなる疑問を感じざるを得ない。

事の発端になった裏金授受で、大学野球部を退部処分となった選手は、野球をする機会さえ失ってしまった。もちろん本人にも責任と認識の甘さはあるだろう。しかし彼を取り巻いた周辺の大人が誰一人として、倫理観や正義感など考えるべき道筋を説かなかったとすれば、それは大人の側の責任が重いといわざるを得ない。有能なスポーツ選手が、周辺に取り巻く不見識や浅薄な大人によって「つぶされた」ことに他ならない。

5. まとめ

世の人々がスポーツに抱く印象は、正々堂々としたフェアプレー精神、困難や苦しさを乗り越えようとする克己心や忍耐力、目標に向かって一心不乱に汗を流して努力するひたむきさ、そして真摯な取り組みの結果として得られる達成感や充実感などであり、不公平感や閉塞感の蔓延する現代社会の中での代償的共感を得ることができる。

人々のスポーツへの憧憬は、さまざまな形に転化する。親が子をプロスポーツ選手にさせたいと願うこともその一例であるだろうが、昨今、親が子に安易にプロスポーツ選手を目指させる風潮については、大いなる疑問を感じている。

スポーツには勝者と敗者を差別する厳しさや冷酷さが存在し、華やかなスポットライトを浴びて活躍できる選手はほんの一握りだとの厳然たる事実がある。その陰では、多数の選手が夢破れて挫折し消えていっているのだ。

とりわけプロスポーツでは結果がすべてであり、勝ち負けへのこだわりは異常に強く、勝てなければ強くならなければ生活もままならない。素質と能力が必要とされる上に、体力、運動能力を極限まで鍛え上げる努力と精神的な強さを求められ、さらには運にも恵まれた者だけが、結果を残しステータスを得ることができる世界である。そして結果を残して成功し一旦ステータスを手に入れたとしても、取って代わろうとする新しい勢力は次々とプレッシャーをかけてくる。そして万が一、怪我や故障、病気にならば地位を保証してくれるものは何もない。このような過酷な現実を、親たちは認識し覚悟ができた上で、我が子にプロスポーツ選手を目指させているのであろうか。

なぜ「プロスポーツ選手」なのか、どうしてプロミュージシャンやプロ棋士、あるいは宇宙物理学者か考古学者ではないのか。その根底には、おそらくスポーツに対する憧憬、一流スポーツ選手の華やかなイメージや人気、さらには高収入も関係しているのであろう。しかしプロスポーツ選手として実績をあげ華やかに活躍して人気を得られるのは、宝クジに当たるほどの確率と考えていい。夢を全否定するものではないが、安易なプロスポーツ選手志向には賛同できない。

社会風潮に煽られるようにスポーツ界においても倫理観やモラル、マナーに反する出来事が多発している。もちろん選手自身の問題である場合も多いが、一方で選手を取り巻く大人たちが、倫理観や正義感に基づくアドバイスが出来ていないケースも多い。

人々はスポーツにおける目標に向かってひたすら努力を重ねる充実感や達成感に憧れ、忍耐や協調など人間としての精神的な高尚さと強靭さに共感し、また体力、運動能力を極限まで鍛え上げる一流スポーツ選手の超人的パフォーマンスに熱狂し、声援を送り続ける。

利己主義がはびこり、モラルハザードの叫ばれる混沌とした社会であるからこそ、スポーツ界にたずさわる人間は、襟を正して行動せねばならない。

参考文献

- 1 小林信也 (2007) 高校野球が危ない! 草思社
- 2 岡澤祥訓 (2001) メンタルを考えよう 株式会社卓球王国
- 3 岡部修一 (2005) スポーツに内在する問題について 奈良文化女子短期大学紀要第36号
- 4 (2006) スポーツに内在する問題について (2) 奈良文化女子短期大学紀要第37号
- 5 玉木正之 (1999) スポーツとは何か 講談社
- 6 (2007) 高校野球「事件史」Sports Spirit No.31 ベースボール・マガジン社
- 7 (2007) 週間ベースボール 5.21・5.28・6.11号 ベースボール・マガジン社
- 8 (2007) Sports Graphic NUMBER 674 文藝春秋
- 9 (2007) GOLF TODAY No.366